

カリタス女子中学校 第二回入学試験

二〇二五年二月一日（午後）実施

国語問題

（五〇分）

*答えはすべて解答用紙に記入すること。

*字数の指定がある場合は、句読点や記号を字数にふくむこととします。

次の①～③の——線部の漢字をひらがなに改め、④～⑦の——線部のひらがなを漢字に改めなさい。④～⑦で送りがなを必要とするものについては、送りがなも書くこと。

- | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| ① | アルコールは揮 ^レ 発 ^レ 性が高い。 | ② | 少しお耳を拝 ^レ 借 ^レ したい。 | ③ | 選挙の潮 ^レ 目が変わった。 |
| ④ | 彼の記録はだれにもやぶ ^レ られたことがない。 | ⑤ | 自分の考 ^レ えをのべる。 | ⑥ | 新 ^レ 発 ^レ 見の星をめいめいする権利。 |
| ⑦ | 天橋立はまさに白砂 ^レ せいしようだ。 | | | | |

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。※の言葉には、文章のあとに注をつけてあります。

こうした二人の間でも、「きもつ」などと言うことは、広い意味では「悪口」に含まれるかもしれませんが、単に「口が悪いだけ」とも言えるでしょう。字面上は乱暴なことを使っていますが、この程度は「軽口」の範囲であって、二人に、絶対に話し方を変えなさいと言いたい人はいないでしょう。

二人の關係性を踏まえると、きついことばを言い合つたとしても、二人はお互いの「A」「B」ができません。つまり、悪い悪口は言っていないのです。ランクが同等であることが自明であるため、少々乱暴なことを言つたくらいでは、「A」「B」ことにはつながりません。

裏を返せば、このように長い時間をかけて作った関係性、お互いの人柄ひとがらや行動への信頼があつてはじめて、《①》が成立するのだとも言えます。お互いの立場、お互いのランクの同等さが揺るゆがないという確信があつてこそ、悪くない形でからかったり、押揶※やゆしたりできるのです。すると、そのような関係性がないところでは、《②》が《③》へと簡単に変化してしまいます。「いじり」と「いじめ」の境界線をまたぐことは難しくないのです。

お笑い芸人の人たちが、お互いをからかって笑いを取る必要があります。背格好や髪型やふるまいといった見た目、お金や人間関係にまつわる失敗といった恥ずかしい思い出、はてはその人の出身地や家族についてまでも面白おかしく「ネタ」にします。

よく言われるのは、こうしたプロフェッショナルの芸人さんの中には、テレビやラジオなどの表舞台を一步降りたとき、同じことを、とくに同業者以外から言われるのを非常に嫌う人がある、ということです。

舞台上では「アホ、アホ」と言われることにより、大喝采だいかっさいを浴びている人物も、帰りのエレベーターの中で「アホ」などと絶

対に呼ばれたくないかもしれません。同じ立場にある出演者同士から、○○といじられることと、まったく知らない道行く人に、○○と呼ばれることは、たとえそこでまったく同じ表現が使われていたとしても、意味合いが異なります。ランクの同等さが保証されないとき、どれほど親しみを込めようとも、発言が人をおとしめる、つまりランクを下げる可能性があるのです。あまり簡単にプロの真似ができると考えない方がよいでしょう（大リーガーの真似が簡単にできるとは思わないのに、どうしてプロの学者や芸人の真似が簡単にできると思うのでしょうか）。

〈中略 1〉

あることばが悪い悪口ではなく、軽口とか冗談に過ぎない、と考えられるもうひとつの理由は、ひとりが悪口を言ったとき、もうひとりも同じように返している、という相互性があることです。やりとりがイーブン、あいこになっているのです。

これは敬語で話すのかそれとも「タメ語」で話すのか、という判断と似ています。誰かが「さん」づけで話して、もうひとりが呼び捨てだとすると、その二人の立場は同等でないと判断されるでしょう。双方が双方に対して敬語のあるなしを合わせていると、二人の立場が同等だと感じられます。

野球の試合中、ベンチの中で、コーチやマネージャーが大きな手帳のようなものに何か書き込んでいるのを見たことがないでしょうか。あれは「スコアブック」と呼ばれ、試合のスコア、誰が何をしたかという細かな記録を残しているのです。

試合のスコアにはたくさんさんの情報が含まれています。単にどっちのチームが何点獲得した、とかただけではなく、選手がいつ交代した、何番目のバッターが何球目にファールを打った、といったことまで書かれています。野球場の電光掲示板に載っている数字や記号は、スコア情報の一部だとみなすこともできます。誰がどの守備位置、ヒットが何本、エラーがいくつ、といった基本的な情報が表示されています。

さて、会話にもスコアがあると考えられています。私たちが会話をを行うとき、手帳も電光掲示板もありますが、ある種のスコアを心の中でつけているのです。はつきりとは口に出して説明できないかもしれませんが、どういう順番で誰が何を言ったか、話している人は先輩なのか後輩なのか、話の中の登場人物は誰と誰か、といった情報を覚えているのです。

「会話のスコア」をつけておかないと、次に話されたことをうまく理解することができないので、私たちはかなりしっかりとスコアの情報を把握しながら会話を続けます。たとえば、クラスメートと、自分たちが受けている数学の授業についてずっと話しているとしてください。そのとき、「先生がさあ」と誰かが言ったならば、非常に高い確率で、「その数学の授業を担当している先生」を意味しているでしょう。

3、その会話に今入ってきたばかりの人ならば、どの先生のことか分かりません。「先生」が当てはまる人物など、世の中に掃いて捨てるほどいるからです。

敬語の使用に関する情報も、スコアによって記録されていると考えることができます。ずっと「はい。はい。そうですね、Hさん」と敬語を使っていた人物が、急に「うん。へー。あっそ、H」と返してきたなら、どうしたのか、とびっくりするはずです。ずっと「うん」なら特に何も思わないのですが、急に変化させた場合、スコアの記録と衝突するため、驚いてしまうのです。

悪口はある意味敬語と同じで、悪口によって作られる上下関係の情報もスコアとして残ると考えることができます。一度「アホ」と言われて言い返さなかったら、自分が「アホ」と呼ばれてもよい下の立場の人間、ということになってしまいます。ですので、すぐに「アホ」と言い返し、相手が自分より下の立場だ、ということにすると、それぞれがそれぞれを「自分より下」に置くわけですから、結果はイーブン、同じ立場に落ち着きます。

もちろん、ここで「悪口には同じ悪口で返すべきだ」と提案しているわけではありません。私たちが同じ悪口を返したくなるのは、スコアのつけ方がそうになっているからだ、と説明しているのです。どのように悪口に対応すべきかについてのヒントは、本書の最後に書いています。

「アホー」「アホっていう方がアホなんですー」「アホって言う方がアホってことはアホって言うてからそっちもアホですー」などと、小学生なら言い合うかもしれません。そのように、きっちり数を勘定して、言われた回数言い返そうとするのは、きわめて子どもじみですが、大人も執念深くやられたらやり返そうとしますので、いずれにせよ、人間には強い応報感情があるようです。

〈中略 2〉

ところで、アナログな決闘と異なり、デジタル空間の弾数は膨大です。オンライン上でのやりとりでは、こうしたお互い様が成立しなくなっていることが分かります。ソーシャルメディアや掲示板において、芸能人、アスリートやミュージシャンといった著名人についての投稿が無数に存在します。場合によっては、何千件や何万件の悪口が並ぶ訳ですから、「アホ」「アホ」の一对一に持ち込むためには、

何千何万回と言いつ返さなくてはならず、そんなことは不可能です。やりとりの数という意味で、イーブンな関係はありえないわけです。

これは、^E デジタル世界の特徴が私たちの悪口に与える影響のひとつです（次の9節でも、ソーシャルメディア運営の役割などに触れます）。一般的に、オンライン上での言語使用は、オフライン上でのやりとりを、さらにややこしくしてしまいます。たとえば、ひとつ前の7節では、何を言うかよりも、どういう立場の誰がどういう立場の誰に言うかの方が大事だ、と言いましたが、オンラインでは、一体誰が誰に言っているのが非常にあいまいになります。場合によっては、本当に独り言をつぶやいているだけのつもりで、誰にも言っていないと本人は思っているかもしれません。しかし、内容が何であれ、それを心の中で思うことと、おおよけの場所で言うことは天と地ほどの違いがあります。

オンライン上での言語使用について、ひとつ気をつけるべき点は、先端デジタル機器と、最新ソーシャルメディアを使いこなすからといって、人間と人間の言語がバージョンアップされているわけではないことです。インターネットのない数千年前の人たちと、現在の私たちは遺伝子も同じで、ことばに関して何か根本的に異なるわけではありません（18節では、昔ながらの生活をしている——田舎暮らしとか平成時代とかそういうのじゃなくて、本当に昔、国家やピラミッドすらないような昔です——狩猟採集民と私たちがいかに似たような言語の使い方をしているのかを紹介します）。

私たちには、オンラインのことばも、オフラインと同じように解釈するクセがあります。たとえば、誰かの投稿を拡散する機能を使うことは（たとえばソーシャルメディアのひとつTwitterの「リツイート」があります）、五〇〇〇年前にもやっていた、人から聞いたことを繰り返すことと何が違うのでしょうか。移動生活をしていて、「東に進めば水場がある」と聞き、それをたくさんの人に伝えようと、キャンプの真ん中で「東に進めば水場がある」と大声で言うとしめます。それ聞いた人たちは、「東に進めば水場がある」と思うでしょう。「拡散は必ずしも賛同の意味ではありません」とオンライン時代の特別ルールを導入されても、私たちはそのルールになかなかついていきません。

《和泉悠『悪口ってなんだろう』（ちくまプリマー新書）より》

〔語注〕

※パートIでの議論……………この前にあるパートIでは、悪口は「人を自分よりランクが下の存在として扱う」ことになるので、

よくないものであることが説明されている。

※揶揄……………からかうこと。からかつてばかにすること。

※こうしたお互い様……………へ 中 略 2 〳の中では、不仲の男性二名がピストルで決着をつけることとなり、おたがいに二

発ずつ打って両者とも外したことで満足し、和解したエピソードが紹介しょうかいされている。

※7節……………冒頭ぼうとうからへ 中 略 1 〳までを指す。

※「writer」の「リツイート」……………現在では、ソーシャルメディア「X」の「リポスト」にあたる、投稿を拡散する機能のこと。

※それ聞いた人たち……………それを聞いた人たち。

問一

1 〳 3 にあてはまる言葉としてもつともふさわしいものを、次のア〳オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えな

さい。記号は一度ずつしか用いないこととします。

ア なぜなら イ たとえば ウ つまり エ しかし オ ところで

問二

二か所の【 A 〳】に共通して入る言葉を、本文中から七字でぬき出して答えなさい。

問三 《 ① 》 《 ③ 》 にあてはまる言葉の組み合わせとして正しいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | |
|---|---|----|---|----|---|-------|
| ア | ① | 悪口 | ② | 悪口 | ③ | ひどい悪口 |
| イ | ① | 悪口 | ② | 軽口 | ③ | 適度な軽口 |
| ウ | ① | 軽口 | ② | 悪口 | ③ | 適度な軽口 |
| エ | ① | 軽口 | ② | 軽口 | ③ | ひどい悪口 |
| オ | ① | 軽口 | ② | 軽口 | ③ | 適度な軽口 |

問四 B プロの真似^{まね} とは、ここではどうすることですか。三十字以内で説明しなさい。

問五 C 敬語 について、次のア～オの中から——線部の敬語の使い方にあやまりをふくむものを、一つ選び、記号で答えなさい。

- ア こちらでバスをお待ちになりますか。
- イ 先生は、当時フランスに行っていらしたそうだ。
- ウ あなたのお書きになった小説を拝読しました。
- エ お客様からちようだいしたケーキを取り分ける。
- オ ご家族の方もぜひパーティーにご参加してください。

問六 D スコアの記録と衝突^{しょうとつ}する とは、ここではどういうことですか。「情報」という言葉を用いて、三十字以内で説明しなさい。

問七

E

デジタル世界の特徴が私たちの悪口に与える影響あたら えいきよう とありますが、これについて次の(1)・(2)に答えなさい。

- (1) 「デジタル世界の特徴が私たちの悪口に与える影響」とは、どのようなことですか。本文中に筆者が挙げていることとして正しいものを、次のア～カの中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 文字でやりとりの記録が残るので、悪口を言われた人が、他者におとしめられた事実に長く苦しめられやすいこと。
イ 悪口も一度発信されると、おおよけの場所で言われたことになるので、無数の投稿とうこうにうもれて発見されにくいこと。
ウ 数えきれないほどの多くの発信が行われるので、他者との悪口のやりとりにおいて、あいこの関係を作りづらいこと。
エ 誰でも世界中の人と交流できるので、オンライン上での悪口は単純化されることが多く、誤解が生まれやすいこと。
オ やりとりの匿名性とくめいせいが高いので、誰が誰に言っているのが非常に分かりにくく、悪口か軽口かを判断しづらいこと。
カ 個人情報保護のため悪口も暗号化されるので、運営者の責任があいまいになり、悪口の発信者を特定しづらいこと。

- (2) オンライン上で行われるコミュニケーションにおいて、私たちはどうするべきだと筆者は考えていますか。筆者の考えをまとめなさい。

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。※の言葉には、文章のあとに注をつけてあります。

中学三年生の女子生徒・能瀬^{のせ}ちさとは、中学二年生の終わりに引^ひ越^こし、転校した親友の女子生徒・平貴緒^{たいらきお}と文通をしている。貴緒はちさとの中学一年生の頃^{ころ}からの友達で、転校の際には、同じ高校は難しくても、同じ大学には行こうと約束した。八月末、貴緒に会いたくてたまらなくなったちさとは、貴緒を自分の街に呼び出した。貴緒もかつて住んでいたこの街を二人で散歩している。その最中、貴緒の転校前に二人が一緒^{いっしょ}に通っていた中学校にたどりついた。

「ねえ、貴緒。進路のことだけど」

中学校の裏門前に着いてしばらく経^たったとき、わたしは切り出した。うちからも、貴緒が春まで住んでいたマンションからも、正門側に回るより近いので登下校時に使うのはいつもこの裏門だった。

今日はどの部活も休みと決まっているのか、錆^さびた金属の頑丈^{がんじょう}な門はきっちり閉^とざされ、『関係者以外の立ち入りを固く禁じます。学校長』ってプレートが掲^{かか}げられている。門を飛び越えないかぎり中には入れそうにない。

貴緒はしゃがんで、持ってきたスケッチブックを太腿^{ふともも}で支えながら、校庭の様子を鉛筆^{えんぴつ}でせつせと写生している最中だった。でもわたしが真剣^{しけん}に話したがつてると気づくと、スケッチブックのページをぱたんと閉じて、立ちあがった。

「進路ね、……ちゃんと話さなきゃだめだってわかってたんだけど」

つぶやいて、白く塗^ぬられた警告プレートの表面を指の関節で軽く叩^{たた}く。コンツ、と硬^{かた}い音がした。

「夏休みも終わるのに。だから引っぱっちゃって、ごめん」

ごめんなんて言わなくていいよって、わたしは笑った。でも口角^{くちかく}は中途半端^{ちゅうはんぱ}な位置までしかあがらなかった。

顔の筋肉の動きがぎこちない。頭の中で疑問が一気に膨^{ふく}らむ。「ごめん」？ 貴緒は何に対して謝^{あやま}っているんだろう。その疑問は不安に変わって、次にはほとんど恐怖^{きょうふ}になった。

何かを聞かされる。

何か、よくないことを。直感^{さくかん}が叫^{さけ}んでいる。

「時間切れ。やっとな決心ついた」

貴緒がまっすぐわたしを見た。Tシャツの襟えりからのぞく鎖骨きこつに、汗あせの粒つぶが

1 浮ういている。

やっとな会いにきてくれたのに。大事な友達なのに。どうしてわたしは、ここまでおびえてるんだろう。わたしは。

わたしは、中一ちゅういちのときからずっと、貴緒をたいせつに思っていて……。

「あたし、美術科のある高校に行く。それで美大をめざす」

貴緒の瞳ひとみは怖いほどまっすぐで、ちっとも揺ゆらがなかった。

わたしの思考は 2 と途切とぎれて、まともな問いかけはひとつも出てこなくて、「美大って、美術の大学？」なんて、決まりきっていることを口が勝手にしゃべった。

うん、と力強ちからくうなずかれる。

「ちさと、ごめん。あの約束、なしにしよう」

貴緒の声がわたしの名前を呼び、貴緒の声がまたわたしに謝あやまった。情報を受け取るのにひどく時間がかかる。どうして、なんで、って胸の中はわめき声でいっぱいになる。違ちがう。全然違ちがう。 B こんなことあっていいはずない。

「ちさと……」

ふたたび呼よばれたとき、その声に心配の色がのっているのを感じたとき、貴緒の手がわたしの身体からだに触ふれようとしたとき。湧わいたのは怒いかりだ。

どうしようもなく激しい怒りだった。

「はじめからそのつもりだったの？」

触さわられたくなくて身体をぐっと引く。貴緒の手が行き場を失って宙にとどまる。それがとてももうつとうしい。

「守る気ないのに約束したわけね」

今はおとなたちの事情に従うしかない。いったんは離はなればなれになるしかない。だけどいつか同じ大学に行って、また一緒に過ごそうって。

あの話は最初から嘘^{うそ}でできてたんだ。

貴緒の瞳を見る。負けないように、力をこめて見つめる。それがついぐらぐらと揺れだすまで。

「違うよ」

貴緒は否定した。めずらしいくらい焦^{あせ}った口調で。

「ちさとが提案してくれてすごく嬉^{うれ}しかったし、あたしもそうしたいって本気で思ってた。でも、あれからいろんなことがあって、考えが変わったの」

信じてほしい、理解してほしいと訴^{うった}えてくる目から、顔を背^{そむ}ける。やめて。理解なんてしない。絶対にしてやらない。

「『いろんなこと』って、たとえば？ もっと気の合う子見つけたとか？ 美術部の子と仲いいんだもんね」

こんなにはかにしたような口調で話せるんだな、わたし。はじめて知った。舌はよく回るのに、興奮して額から汗がだらだら出てくるのに、ひとつ発音することに身体^{しん}の芯が固まってい^Cく。

「その子とアーティストにでもなるつもりなの？ やめときなよ、そんな夢に賭^かけるの。なりたいひと全員の夢が叶^{かな}うわけじゃないってわかってるでしょ。いくら才能あるからって、それが……」

それが。

それが、なんなのか。

その先が続かなかった。

才能あるからって。そう、貴緒には才能がある。描^かくのが好きって気持ちもある。そのふたつだけで、どこまでも突^つき進める子なんだ。

周りの意見なんて関係なく。

^D その〈周り〉の中に、ちっぽけなわたしが含ま^{かく}れている。動かしようのない事実なのに、ずっと無視してきた。気づかないふりをすればごまかせると思った。

だけどやっぱり無理だった。ほんとうのことはいつでも目の前にあって。

貴緒にとってわたしは、もう親友じゃないんですよ。ずっと大事にしてく必要なんかないって、気づいたんですよ。

※ むうこが消しゴムをかけて、なかったことにした、あの手紙と同じで。

「たしかに、……新しい学校で仲間ができたのは大きかったよ」

貴緒が 3 と言った。

「ずっとひとりで描いてきて、それで満足で、誰かと一緒にものをつくるとか全然想像できなかった。……でもやってみたら新鮮で、楽しいんだ。しかもみんな、それぞれ目標が違うの。漫画が好きな子は、たとえ関係ない仕事に就いても一生漫画描くって決めてるし、別の子は小学校の先生になって図工を教えるって」

E 胸の真ん中は凍りついたまま、もうよいいなこと聞かせないでって拒絶している。なのに耳をふさげない。次に来ることばを待っている。

どんな言い訳も、嘘も、かすかな息づかいさえも。

聞き洩らしたくなくて。

「高校から美術科に行くつもりなのは、今のところあたしだけ。正直、ほんとにだいじぶなのって自分でも思うよ。顧問とか担任にも、なかなか言い出せなかったし、今も胸張って話せない。……でも誰にも言わないでいれば、ほんとうにやりたいことが忘れられるかっていうと、たぶん違うんだ」

貴緒の話し方が好きだった。この話し方が、ずっと。そんなことを今さら思い出した。思い出したってことは、忘れかけてたんだろうか。

「あたしが自分で決めた。好きなことを、好きなだけやってみたい。親は親、自分は自分だから」
どうしてここで、親の話が出てくるの？ って。

わたしの目に浮かんだ戸惑いをまばたきひとつで汲み取ったみたいに、貴緒は笑った。

「うちのお父さんとお母さん、別居したんだよ」

「え？」

「あたしはお父さんのほうについてった。それが引越した理由」

「ちよっと、待って。何それ……」

悲鳴みたいにかすれた声が、自分の喉から飛び出した。いきなりすぎてついていけない。別居？ お父さんのほうについてった？
だけど貴緒はすっかり落ち着いて、笑顔をくずさなかった。

「うちの親、あたしが覚えてるかぎりずっと仲悪いから。昔いろいろあったらしいんだよね。でもふたりとも外面そとづらだけはいいし、意地でも離婚りこんしないの。結局は似たものどうしじゃんって思うよ、同族嫌悪どうぞくけんおってやつ」

困ったように眉まゆをひそめて。小さい子が内緒話を打ち明けるときみたいに、いたずらっぽい表情をつくって。

「で、子どもはすっごく迷惑めいわくするわけ。ひい兄※が高校受験するときも、家人中めちゃくちゃだったしさ。あれでよく受かったよ、ひい兄はうちを出てほんと正解」

貴緒は穏おだやかに微笑ほほえんでみせる。

「でも外面いいたって限界あるからさあ……。友達にはとくにバレてる気がして、あたしずっとひやひやしてた。スマホが苦手になったのも、それが原因かも。考えちゃうんだよね、自分の知らないところで『貴緒、無理しててイタい』って言われてるんじゃないかとか」

「そんな」

「ちさとだって気づいてたでしょ？ あたしの家、なんか変だった」

「そんなの知らないよ、全然……」

でも、全然というわけじゃなかったかもしれない。

違和感いわかんはずっとあって、ただその正体がわからなかった。貴緒が家に呼んでくれないことや、そもそも家族の話をあまりしないことや、それから。それから……。

二年間、いったい何を見てたんだろう。ずっと隣となりにいて。それを自分だけにゆるされた特権のように感じながら。

「いつかこうなるってわかった。っていうか、もっと早く離ればよかったんだよ。もう壊れてたのに、続けられるふりしてたのがうちの家族の定めなところ。これでやっと一歩進んだわけ」

口調は明るい。すがすがしいくらいに。本音を押し殺おしてるわけでも、強がっているわけでもなく、こういうことは起こるもんなんだよって、聞き分けのない誰かに言い聞かせるみたいに。

ただ、悲しそうな目。悲しいことを知っている目だった。貴緒は悲しかったんだ。いつでも悲しかったんだ。それでも好きなものだけは大事に守り通してきた。

F やつと気づいた。もう遅い。おそ

だって今、その貴緒に最低な態度をとったのは。

「ああ、でも。もしお父さんとお母さんがさっさと別れてたら、あたしはきつとここの学校には入らなくて」

そう言つて顎^{あご}をくつとあげて、閉まった門の向こう、敷地^{しきち}の奥^{おく}を見る。レンガ色に塗^ぬられた真新しい校舎が、しんと眠^{ねむ}つて午後の太陽に照らされているのを。その横顔^{りんかく}の輪郭^{りんかく}も、どんどん光の中に溶^とけていく。

「そしたら、……」

ことばは、継^つぎ足されることなく消えた。貴緒がこつちを振り向いた。

瞳^{ひとみ}にわたしが映っている。

貴緒の左手が伸びてきて、少しためらつて、わたしの髪^{かみ}に触れた。襟足^{えりあし}をするりと払^はうように。それからその手を自分の首に当てて。

「やっぱり、髪型^{かみがた}だけ同じにしたつて似てないね。でもこれ、けっこう気に入ってるんだ」

ちさと、と名前を呼ばれた。

まるでこれが最後みたいに、優^{やさ}しく呼ばれた。

スケッチブックを腕^{うで}にかかえたまま、ジーンズを穿^はいた脚^{あし}は、やがて駅へ向かつて歩きだす。帰るために。自分の場所^{もど}へ戻^{もど}つていくために。ひとつの声をここに残して。

G 「あたしが髪切ったのはね、忘れたくないからだよ」

〈真島めいり『文通小説』（講談社）より〉

〔語注〕

※むうこが消しゴムをかけて、なかったことにした、あの手紙と同じで

……「むうこ」はちさとの中学二年生の時のクラスメイトで、中学三年生の現在はクラスが分かれてしまったので連絡^{れんらく}も取り合わなくなった。むうこが在籍^{ざいせき}する調理部では、文通している生徒が多い。中学二年生の時、ちさととはむうこに手紙を出しているが、話もしなくなった中学三年生の時、ちさとが出した封筒^{ふうとう}の文字をむうこが消しゴムで消して、調理部の文通のために再利用していることを見つけてしまった。

※同族嫌悪……似たもの同士が互いを不快に感じ、憎しみ合うこと。

※ひい兄……貴緒の兄、洗。

問一

1

3

にあてはまる言葉としてもっともふさわしいものを、次のア～エの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。記号は一度ずつしか用いないこととします。

ア　くるり　　イ　ぶつり　　ウ　じわり　　エ　ぼつり

問二

A

でも口角は中途半端な位置までしかあがらなかったとありますが、なぜですか。その説明としてもっともふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　良くない話を聞かされることは中学校に着いた時から察しており、恐ろしさで全く笑えなかったから。
イ　関係者以外の立ち入りを固く禁じている学校の校庭を写生していることに、不安がつのつてきたから。
ウ　会話しているうちに緊張感がどんどん増してきて、緊張で顔の筋肉が動かなくなってしまったから。
エ　貴緒の言葉に笑おうとしたが、このあとの貴緒の言葉に不安や恐怖を感じ、十分に笑えなかったから。
オ　貴緒が進路の決定をだらだらと先のばしにしてきたことに怒りを感じ、顔がこわばってしまったから。

問三

B

こんなこととありますが、どのようなことですか。四十字以内で書きなさい。

問四

C 身体の芯が固まってい^く、^E 胸の真ん中は凍りついたまま とありますが、これらの表現から読み取れる、この時のちさとの心情はどのようなのですか。その説明としてふさわしくないものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 必死に説明する貴緒に対して拒絶^{きよぜつ}する言葉を投げかけていくことで、冷たく黒い感情が積み重なり、心を支配していったということ。
 イ 貴緒の説明を聞くと、自分は親友として認められなくなったのかもしれないという事実^{じじつ}に気づき、苦しさが増していったということ。
 ウ 貴緒のことを理解したくない思いから、ばかにしたような口調で突き放す^つことで、興奮しつつも心は徐々に冷えていったということ。
 エ 新しい学校でできた貴緒の仲間の話は、ちさとにとっては受け入れがたく、ますます拒絶の気持ちが大きくなっていったということ。
 オ 貴緒が焦^{あせ}って言い訳を並べている姿を見たことで、貴緒への気持ちはゆっくりと冷めていき、ついには失望してしまったということ。

問五

D その〈周り〉の中に、ちっぽけなわたしが含ま^{ふく}れている とありますが、どういうことですか。その説明としてもっともふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 貴緒は周りの意見を気にせずとも突き進める才能があり、自分も貴緒にとって取るに足らない存在であるということ。
 イ 自分だけは才能にあふれた貴緒の周りにいることが許されており、加えて意見することも認められているということ。
 ウ 才能にあふれた貴緒の周囲は、絵の才能がある仲間だけが居られる場所であり、自分は小さな存在であるということ。
 エ かつて自分は貴緒にとって唯一^{ゆいいつ}の友人であったのに、いつの間にかちっぽけな存在へと変化してしまったということ。
 オ 貴緒の周囲は優^{すぐ}れた仲間だけが集まっているが、その仲間から認められていない自分は劣^{おと}った存在であるということ。

問六

F やつと気づいた。もう遅い^{おそ}とありますが、どういふことですか。ちさとが「気づいた」内容に必ずふれつつ、ちさとの心情をわかりやすく説明しなさい。

問七

G あたしが髪切ったのはね、忘れたくないからだよとありますが、貴緒は元々^{ちようはつ}長髪であり、転校後に髪を切っています。以下は、このことと本文全体についての教師と生徒の対話です。これを読んで、あとの(1)・(2)に答えなさい。なお、同じ記号には同じ言葉が入ります。

教師——貴緒の「あたしが髪切ったのはね、忘れたくないからだよ」という発言を理解するために注目したのは、14ページの「ああ、でも。もしお父さんとお母さんがさっさと別れてたら、あたしはきつとここの学校には入らなくて」です。この貴緒の言葉には、どんな気持ちがかめられているでしょうか。

生徒——「ここの学校」とはちさとと貴緒が通っていた中学校のことですね。貴緒のお父さんとお母さんが早く別れていれば「この中学校に入らなくて」、つまり「X」^Xということでしょうか。

教師——そうですね。その後の「そしたら、……」の「……」で消えてしまった言葉は「X」^X「という内容だと考えられます。でも、そうはならなかった。

生徒——その後、貴緒はちさととの髪に触れ、「やつぱり、髪型だけ同じにしたって似てないね。でもこれ、けっこう気に入ってるんだ」と言い、「あたしが髪切ったのはね、忘れたくないからだよ」と続けています。どういふことでしょうか。

教師——貴緒は「転校後」に髪を切っています。貴緒が髪を切ったのはなぜだと思いませんか。

生徒——そうか、貴緒は家庭のことがあってちさとと離れ^{はな}離れ^{ばな}になって、^Y「という気持ちだった、ということですね。

教師——その通りだと思います。

(1) ^Xに入る言葉を考え、十五字以内で書きなさい。

(2)

Y

に入る言葉を考え、三十字以内で書きなさい。

国語の問題はこれで終わります。

